

実装活動プロジェクト名：

市民と共に進める災害医療救護訓練プログラムの実装

実装責任者：依田 育士（国立研究開発法人産業技術総合研究所、主任研究員）

実装支援期間：平成29年10月1日～令和2年3月31日

1. 総合評価

十分な成果が得られたと評価する。

大災害の急性期に発生する膨大な医療ニーズに対応するためには、平時における災害医療訓練が重要である。実装責任者らはこれまでに、医療救護所を対象とした周辺住民等が参加可能な災害医療訓練のための医療救護訓練用素材を含む医療救護訓練雛形（以下「素材集」という。）を開発した。素材集には、訓練設営者向けとして、ムラージュ（化粧）シール画像、傷病者症例カード、訓練運営者名簿、訓練用資機材リスト、医療救護訓練概要全体説明、運営者進行表、アクションカード、評価表、訓練評価とアンケート、医療救護所設営マニュアル、トリアージ・コミュニケーションマニュアル等を、市民向け事前教材として、応急手当動画集（YouTube）、災害医療ガイドライン、災害医療タッチ（大人向け学習アプリ）、災害医療クエスト（小中学生向けイベント用アプリ）等が含まれている。本プロジェクトの最終目標は、素材集を利用した災害医療訓練の成功例を作ることによって、災害発生時に全国の市区町村と災害関連病院が、災害医療体制を構築できるようにすることである。

実装支援期間終了時のプロジェクトの目標は以下の通りとした。

- ①素材集を利用した新宿区の医療救護所での住民参加型医療救護訓練の継続実施を実現するとともに、他地域における医療救護訓練実施を実現すること
- ②東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、静岡県、愛知県の災害医療関係者に素材集を送付することで得られる反応と、医療救護訓練から得られる知見から、素材集を改良すること
- ③ホームページで実際の利用状況や実施上のノウハウ等を公開し、より多くの市区町村や災害関連病院などが利用しやすい環境を提示することや、災害医学会の学術集会（全国大会）等の学会で、素材集の展示出展や発表を行うなどの広報活動を行うこと。また、プロジェクト期間終了後も、ホームページの更新、維持などの実装活動を継続するための体制を作ること

新宿区の医療救護所だけでなく、南多摩保健医療圏のすべての災害拠点病院と災害関連病院で素材集を利用した医療救護訓練が実施され、今後も継続実施される見込みである。その他地域における素材集の利用も進んだ。素材集は、実装活動によってさらに使いやすいものに改良されるとともに、積極的な広報活動によって利用が拡大した。また、当初の実装活動計画にはなかったグッドデザイン賞を受賞した。実装責任者の熱意のある活

動によって「市民と共に進める」という意味が社会に理解されたことは意義深い。さらに利用事例を増やし、内容を改良・充実させていくことで全国展開につなげてほしい。十分な成果が得られたと評価されるが、今後の継続的な普及と拡大に向けた実施体制の整備が望まれる。

2. 各項目評価

(ア) 目標の達成状況

概ね達成されたと評価する。

新宿区では、素材集を利用した住民参加型の医療救護訓練が、新宿区にある全 10 か所の医療教護所で実施された。プロジェクト終了後も継続して実施されることが期待される。東京都南多摩保健医療圏の災害拠点病院と災害拠点連携病院の全てが、素材集を医療救護訓練で利用するなど、他地域における素材集の利用も進んだ。災害医療関係者に素材集を送付することで得られた反応と、医療救護訓練で得られた知見から、素材集はプロジェクト期間中にさらに使いやすいものに改良された。学会での発表やイベントでの展示、ホームページでの公開等の広報活動によって、素材集の利用は拡大した。プロジェクト最終年度には、「超急性期医療救護訓練キット トリアージ 72」としてグッドデザイン賞 2019 を受賞した。ホームページに掲載した YouTube の応急手当動画集「折りたたみ三角巾の使い方」では、プロジェクト終了時点で 5 万回の再生回数を超過しており、教科書への採用、社員教育での利用、スポーツボランティア協会での認定プログラムでの利用等が確認されており、素材集の利用は増加している。一方、ホームページの更新、維持などの実装活動を継続するための体制づくり、仕組みづくりが進んでおらず、今後の実装活動の継続、発展のために、体制づくり、仕組みづくりが望まれる。

(イ) 実装支援期間終了後の実装の継続及び発展の可能性

可能性ありと評価する。

医療救護訓練には幅広い年齢層から多くの市民が参加しており、市民の医療救護活動に対する関心の高さがうかがえた。新宿区の医療教護所や、東京都南多摩保健医療圏の災害拠点病院、災害拠点連携病院では、素材集を利用した市民参加型の医療救護訓練が今後も継続して実施されると思われる。ホームページや展示会への参加による広報活動を継続することによって、素材集を利用する医療救護訓練が今後さらに増加すると思われる。素材集は大規模地震発生時の医療救護訓練を想定して開発されたものであるが、災害は、医療以外に、台風、水害、大型事故、テロなど多岐にわたる。実装責任者らは、プロジェクト終了後にそれら災害の救護訓練に対応できる素材集を開発する予定であり、多種多様な災害での利用も見込まれる。今後の継続と発展に期待したい。

(ウ) 組織体制は適正であったか

適正であったと評価する。

医療機関、自治体、市民との連携がよく図られており、プロジェクトの趣旨が関係者に理解されていた。医療機関の熱意を引き出したことは意義深い。組織体制は適正であったと評価できる。ただ、プロジェクトの運営は実装責任者の個人的努力によるところが大きく、プロジェクト終了後の実装活動の継続、発展のために、実装活動の拡大を可

能にし得る体制の整備を進める人材や機関の参加が望まれた。

3. その他特記事項

災害時の救護訓練は繰り返すことに意味がある。素材集は「遊び」の要素を取り込んでおり飽きさせない工夫があることを評価したい。市民のだれもが「自助」と「共助」の重要性を肌で感じているが、本プロジェクトの考え方はそれに非常に合致するものではないだろうか。「市民と共に進める」という考え方は非常にユニークで、大きな可能性があり、今後の発展と継続に期待したい。

以上

<別紙：評価者一覧>

	氏名	所属・役職
プログラム 総括	富浦 梓	元 東京工業大学 監事
プログラム アドバイザー	五十嵐 道子	フリーランスジャーナリスト
	川北 秀人	人と組織と地球のための国際研究所 代表者
	澤田 澄子	元 キヤノン株式会社 CSR推進部長
	鈴木 浩	日本経済大学 大学院経営学研究科 特任教授 / メ タエンジニアリング研究所 所長
	塚本 修	一般財団法人石炭エネルギーセンター 理事長 / 東京理科大学 特任教授
	前田 裕子	九州大学 理事/株式会社セルバンク 取締役（管理 部管掌）
	山本 晴彦	山口大学 大学院創成科学研究科（農学系） 教授
	善本 哲夫	立命館大学 経営学部 教授
	渡辺 多恵子	淑徳大学 看護栄養学部 教授